

かせぎとつとめ

副会長 広崎膨太郎



副会長の担務の一つとして大会委員長を務めていることもあって、このところ総合大会、ソサイエティ大会に毎回出席している。昔は春季全国大会、秋季全国大会として慣れ親しまれ、特に若手にとっては一人前の技術者になるために他流試合を行う貴重な登竜門であったし、先輩からもそういう指導を受けてきたものである。それ以上に、その当時は産官学を問わず業界全体が、こうした相互啓発の場を所属の違いを超えて皆で支えるボランティア活動に大きな意義を見だしていたように思える。

筆者の若かりし日、全国大会にて当時としては画期的な外部タイミング方式を発表したときのことである。本人としては満を持しての発表の後 Q&A に入ったときであった。教室の最前列にて腕組みをして聞いておられた初老の紳士が真っ先に質問に立ち、「こうした位相伝達系の特性についてはかつて〇〇氏がヒルベルト変換を用いて解析しているが君はこれを勉強したか」というものであったように記憶している。残念ながらそこまで深く考察しておらず、早速勉強しますということを冷汗をかきつつお答えした。この経験は筆者にとり大変な刺激になり、位相空間論、信号空間論、測度論など徹底的に勉強する契機となり、後日 OFDM 方式の数理基盤、設計基盤の確立に役立った。今にして思えば大変貴重な叱咤を与えて頂いたこの初老の紳士は喜安善市先生であった。

こうした思いを抱きながら去る 3 月 17 日から 4 日間愛媛大学で開催された総合大会に参加したのであるが、実は今回の総合大会についてはその企画段階では昨今の経済危機の影響を心配せざるを得なかった。特に産業界においては半導体を中心とする経営悪化、資金調達市場の不安定化に伴い徹底した経費節減を余儀なくされており、大会委員会においても参加者数の急減に備えて運営費の緊急圧縮を行う、経営でいういわゆるコンティンジェンシープランを立てておくことを事務方に指示したほどである。しかしながら結果は思いがけず良い方向に展開した。厳しい経済不況にもかかわらず発表論文数、参加者数共にほぼ昨年並みを保つことができたのである。改めて電子情報通信分野の技術者、研究者のイノベーションにかける情熱を再認識するとともに、こうした総合大会が、近代化の中で健全な批判精神を貫いた漱石の町でもある松山で行われたことに深い感慨を覚えた次第である。

こうして松山での総合大会は成功裏に終わったのであるが、筆者として気になる統計データが手元に残った。過去 10 年間の発表論文数の推移を見ると、官界及び学界がある水準を安定して保っているのに対し、産業界の発表数は年を追うごとに単調減少し 30% 減となっているのである。確かにこの 10 年間電機業界を取り巻く経営環境は厳しく、直接金にならない学会活動への優先度を下げざるを得ない状況があったことは同じ産業人として理解できる。しかし米国を中心とする金融資本主義のもとらした昨今の惨状を目の当たりにするにつけ、こうしたボランティア活動の場を大切にすることの重要性を改めて考えさせられる。江戸時代、一人前の大人と認められるには“かせぎ”と“つとめ”ができることが要求されたという。“かせぎ”は文字どおり糊口をしのぐ金儲けができることであるが、“つとめ”は世のため人のために働くことである。こうした精神基盤の上に世界を驚嘆せしめた明治近代国家が建設されたことを思うと、産官学共に今一度“かせぎ”と“つとめ”を果たす大人となるべき時代に差しかかっているのではなかろうか。